



今こそメイドインジャパン

(11月のごあいさつ)

平成 25 年 11 月 1 日 (金)

11 月は、沖縄の初秋です。空気も澄んで最もいい季節です。

東京トーマツ会の第 1 回トーマツ未来塾に参加させていただき、前中国大使の丹羽宇一郎先生から「日本経済の先行きと企業経営のあり方」と題するご講演を聴き大いに考えさせられた。それは、日本の現状をどう変革し、隣国である中国をどのような視点でとらえるかという点である。

今、日本の現状と近い将来を考えると大きな問題を感じる。最大の問題は、人に対する投資が充分行われていないことである。先ず、将来のための**教育投資**である。明治初年に世界最高と言われた教育費予算が、最近では GDP 比で 3.3%と OECD 各国平均 4.9%の 3 分の 2 にまでに低下している。次に、**人口減少時代**を迎え、**非正規従業員**が 40%にもなろうとしている。安定した職場なしに人口の再生産は無理である。これでは将来の国富を蓄積することはできない。お金がないということである。更に、日本には**軍事力**が無い。戦争のために軍備を整えよと言っているのではない、他国と対等な交渉のためには**軍事力**を備える必要がある。自立性であり、力が必要である。国として、**金も無ければ、力も無い**ではどうしようもない。

原点に返って考えてみる必要があるということではないか。**原点とは漢倭奴国王印**(かんわのなのこくおういん)ではなかろうかとふと考えた。後漢書東夷伝にみえる倭の奴の国の王が、**後漢の光武帝に朝貢**したときに賜ったという印の話である。この当時、日本は中国の一部というか、日本列島に存在する国家は中国の属国的地位にあった可能性は大である。中国の属国であることを今更考え、確認せよというのではない。そんなときもあったのかもしれないという柔軟な考え方は必要である。かつて、**沖縄の琉球国**は、中国の皇帝に対して**朝貢貿易**を行った。朝貢貿易というのは、中国の皇帝に対して琉球の物産を献上するとともに、琉球での**支配権**(琉球の国王であるということ)を認めてもらうという行為である。中国皇帝は、琉球国王であることを認めると同時に、献上された物品の数倍もの**答礼**を行った。これは強国の周辺国の**一種の安全保障**であり、**賢明で実利的な経済的対処**であった。

中国という巨大な国家を考えると、**独立国日本**という考え方は、**現在の対米一辺倒**ともいべき**異常な態度**を含め、もう少し柔軟性を持って検討する必要があるのではなかろうか。それは、沖縄という日本より更に小さな地域で見たときに感じる中国の巨大さであり、日本の弾力的で**実地的な対処の必要性**である。日本は中国の大きさを正確に理解していないのではないか。独立国として日清戦争を経て、中国を植民地化した経験の記憶が、まだまだ大きく残っているのではないか。

勿論、日本が中国の属国であるとか、将来、中国に従属すべきことはある筈もなく想像したくもない。**無意味な紛争を避け、日本の生きる道**として中国の大きさを虚心なく認めた上で、**広大な市場**、勿論それは中国人自身の市場であり、世界各国の市場でもあるが、それを高品質で親切な食品、日用品、運輸などの**日本の商品**が消費市場とするような発想が必要だと思った。